

未来の造り手としての私たち

学校の様々な活動が、少しずつ動き出しました。今年はコロナウィルスの影響で、多くの制限の中で活動を進めなければなりません。今号では中学生徒会執行部の活動について、その立ち上げから現在までの経過をご紹介しますと思います。



スタートは「レジ袋有料化」、ゴールは「SDGs」



プラスチックごみの削減を「SDGs宣言」に盛り込む

中学部では、昨年度より「Nagano SDGs プロジェクト」に参加し、自分たちが持続可能な社会づくりにどう関わるかを表明する「SDGs宣言」を、今年も行います。

6月、中学生徒会執行部は、何を宣言し、どんな活動を行うかについて、考え始めました。

今年7月から、レジ袋が有料化されることを受け、プラスチックごみの廃棄問題に着目し、「レジ袋の削減」を宣言の中心にすることが決まりました。

無料で配布され、軽くてなんでも入れられるレジ袋は、人間にとっては非常に便利です。しかし、山や川で投棄されたレジ袋は、やがて海に流れ着き、海洋生物がクラゲと間違えて食べてしまったり、体に絡みついたりして、命を落とすことが大きな問題になってしまいます。また、レジ袋だけではなく、プラスチックごみ全体の大きな問題として、これらが細かく砕けた時にできる「マイクロプラスチック」が、魚などの体に蓄積することで悪影響を与えたり、その魚を人間が食べることへの危険性も問題視されています。土壌中でも自然に分解されないため、何百年と残り続けます。

そこで中学生徒会の具体的な活動として、植物が原料であるコットン（木綿）製のエコバッグを作成し、販売するアイデアを思い付いたのです。

さて、エコバッグは本当に「エコ」なのか？



綿花

ところで「モノを作る」という行為は、環境にどのぐらいの負荷をかけるのでしょうか？

例えば、コットンの原料である綿花の栽培には、広大な農地と農薬が必要になります。森林破壊や土壌の流出による環境への影響、農薬汚染による生物への影響について、専門家から様々な問題点が指摘されています。

デンマークの研究（2018）によると、レジ袋を1枚生産してから処分するまでの環境に対する負荷は、オーガニック・コットン製のエコバッグ1枚を生産し処分することの2万分の1なのだそうです。つまり、オーガニック・コットン製のエコバッグを生産したら、レジ袋の代わりに2万回使用しなければ、かえって環境への負荷が大きくなってしまいます。

「エコバッグは、本当にエコなのか？」。今まで当たり前だと思っていたことを一旦疑ってみる批判的視点をもつことで、別のアイデアも生まれてきました。それが、新たにモノを生産するのではなく、「4つのR」で考えることです。

環境の「4つのR」とは

環境のことを考えた時、新しい材料でモノを生産するよりも、資源を繰り返し利用する方が負荷が少なくなります。「4つのR」とは、4つの言葉の英語の頭文字（R）をとった、ごみを減らすためのキーワードで、日本各地の自治体で4R運動が推進されています。

【1】 Refuse (リフューズ) …… 「いらぬ」と、断ろう

～ごみになる物は発生源から断ちましょう～

【2】 Reduce (リデュース) …… 減量しよう

～ごみとなる物が少なくなるよう行動しましょう～

【3】 Reuse (リユース) …… 繰り返しつかおう

～使わなくなった物は他に活用する方法を考えましょう～

【4】 Recycle (リサイクル) …… 再資源化しよう

～資源ごみは積極的にリサイクルし、有効活用を進めましょう～



この4Rを活動の柱において、新品のコットン製エコバッグをつくるのではなく、リサイクルで材料を賄う案が浮上りました。「ブランドの服を安く買い取って材料にする」、「子どもの古着を加工する」などのアイデアに対し、「本当にエコなのか、実際に作ることはできるのか、他に課題はないか」など、様々な角度から（多面的）、弱点を見つけながら考え（批判的思考）しました。

その結果、リサイクルされた紙で作られている「新聞紙」をさらにリユースすることにより、ゴミのリデュースを行うこともできる「新聞紙で作ったエコバッグ」を無料で配布することになりました。



プレゼン資料をつくる中学生徒会役員



配布の機会は、9月12日（土）、長野市の「ワールドフェスタ」です。

これを生徒会執行部の閉ざされた活動にするのではなく、配布するエコバッグを中学全員が作成して、開いた活動にすることを目指します。

終業式の日、生徒会役員が中学生全員に対して活動の目的を話し、作り方を教えました。



長野市ワールドフェスタ出展団体会議で 中学生がプレゼンテーションを行う

地域の大人たちに、中学生徒会が意思を伝えました

8/3、ワールドフェスタへの参加団体の代表者が集って、打ち合わせを行いました。そこで中学生6人が、文化学園の活動の意図を、大人たちに堂々とプレゼンテーション（意見表明、発表）しました。プラスチックごみによる汚染に対し、レジ袋の削減の必要を訴え、ワールドフェスタで使用されると思われるレジ袋や紙袋をできるだけ準備しないでほしいこと（リフューズ）、文化学園長野中学が、500枚の新聞エコバッグを会場で配布するので、来場者にはそれを使ってもらいたいことを述べ、快い賛同と称賛を受けました。



さらに、ワールド・フェスタの趣旨でもある異文化交流を踏まえて、材料となる新聞紙を様々な国の言語で書かれたものにしたこと、それを提供してほしいことも伝えました。賛同して下さる団体の方には、学校へ届けていただけないかとお願いをしました。

地域の方々の協力を得て、活動が「自分のモノ、みんなのモノ」になることを意識して、当日を向かえられればと思います。



Goals

学びの目標は…



持続可能な社会づくり

ユネスコ憲章に示された平和や相互理解の促進というユネスコの理念の実現を目指します。SDGs「17の目標」も同様の目標と言えます。

Concepts

何を学ぶか

多様性・相互性・有限性
公平性・連携性・責任制

「持続可能な社会とは何か」を考えた時、この6つの視点が含まれていることが分かります。世界は様々な人で構成され、その人たちが理解し、尊重し、協力し合って、今だけでなく将来の世代へ豊かな地球の営みを受け継ぐ重要性を学びます。

Processes

どのように学ぶか

誰もが学習者で、文化や意見が違う。
他者を尊重し、互いに関わり、学び合う

Technique

手法 (例)

国際間・国内
地域間・交流

協同学習

横断的学習

課題探究学習
PBL

PBL … Project Based Learning (未来教育プロジェクト学習)
横断的学習 … 分野や科目を超えた知識のつながりを使う学習
協同学習 … グループでの探究学習やアクティブラーニング等

<この活動の位置づけ> ある目的を達成するための活動を進める中で、計画を立てたり、課題を解決したり、他者と協働したりする力を養う学び方をPBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）といいます。

AI時代、人間の知識の量は到底機械にはかないません。知識量を重視する教育ではなく、実際にそこにある課題を皆で解決したり、体験し失敗したりしながら、自分の頭で考えて行動できるような「生きる力」を育てます。教師は「ファシリテーター」として、学びの場を提供します。

出典：文部科学省(2018)をもとに筆者作成

<参考・引用>

Valentina Bisinella et.al (2018), Life Cycle Assessment of grocery carrier bag, Ministry of Environment and Food of Denmark, The Danish Environmental Protection Agency, Denmark
大阪府堺市HP『ごみを減らす4R運動』(http://www.city.sakai.lg.jp/kurashi/gomi/gomi_recy/recycle/4rundo.html)

全校生徒のみなさんに 新聞紙エコバッグの作成にご協力ください！ 中学部からのお願い

9/12（土）、長野市セントラルスクエアにおいて、「ワールドフェスタ IN 長野 2020」が開催されます。

そこですべての来場者へ、会場内の買い物等に使用していただく「新聞紙エコバッグ」を配布し、プラスチックごみの削減や資源の有効活用について考えるきっかけにさせていただきたいと思っています。

これを学校全体のパートナーシップで実行出来たらすばらしい！

作り方を下記に紹介します。5分もあれば作れますので、ぜひ作って中学部の活動に提供してください！

<用意するもの>

- 英字新聞 1枚 または日本語以外の言語の新聞（ワールドフェスタの趣旨に合わせています）
- 細い荷造り用の麻ひも、または紙ひも 約40cm（なければ新聞紙で作成可）
- ハサミ、カッターなど ● ホチキス ● のり



1 新聞を開いて、長い方の辺が重なるように2つ折りにします。

2 さらに3等分になるように折ります。

3 左側の折り目から2~3cm ぐらいのところで切ります。（短い方は、取っ手を作ります。）

4 折り目の内側にのりをぬって。反対側の端を中に挟み込みます。

5 筒状になったら、新聞の橋が重なっている方を下に、折り目を上にします。下から5~7cmのところを上におき、開きます。

6 開いた部分が底になります。底の橋3~4cmぐらいのところを折り、1~2cmぐらい重なるようにします。

7重なっている部分をのりづけします。この時、バッグの内側までのりをぬるとバッグが開かなくなるので注意！新聞の端の部分ものりづけし、びらびらしないようにします。

取っ手を作ります

③で切り落とした部分をタテに半分に切ります。

両端が真ん中で重なるように折り込み、その部分が内側に来るようにさらに折ります。

今度は縦に半分に折ります。

さらに折り目のある方を直角に折り、開きます。

※これをもう一本作ります。

本体に、ホチキスで×状に止めます。（ホチキス1回だと取れてしまいます）2本の取っ手を本体の両側に取り付けます。

本体完成

<作ったエコバッグの提供方法>

● 9月10日（木）までに、中学職員室へ。

※日本語の新聞でももちろんバッグは作れますが、ワールドフェスタの趣旨に合わせて、今回は英字新聞などの外国語の新聞を主に使用したいと思います。英字新聞が必要な方は、中学職員室にありますので、申し出てください。

※できるだけ、何度か使用できるようにしっかりとしたものをご提供ください。

● 英字新聞の提供も募集します！
8月末ぐらいまでに中学職員室へ！

新聞
エコバッグ
完成

QRコード
はこちら！



★YouTubeでも作り方が見られます！ 作り方を確認したい人は、こちらにアクセス！！ → https://www.youtube.com/watch?time_continue=7&v=GIPGDV4gx28&feature=emb_logo

一般社団法人長野県新聞販売従業員共済厚生会 「第9回 学生記者海外派遣」 応募作品紹介その3

「学生記者海外派遣」は、長野県内在住の中学生10人と高校生10人を中高生記者として米国に派遣する、新聞販売業の皆様のご支援による「グローバルな視野を持った若者の育成」の企画です。2020年夏、約1週間訪問地で取材活動を行い、帰国後に書く記事が信濃毎日新聞に掲載される予定でしたが、今年度はコロナウィルスの影響により、派遣が中止されました。応募作品を掲載は今回が最終回です。テーマは「私と新聞」です。

「表現の自由」

文化学園長野高校2年(現在) 所 梨香

「表現の自由」は、なくてはならないものです。小説・漫画・絵・彫刻などの芸術的なものにはもちろんですが、新聞などの報道するものにも必要です。私は、小説や漫画や絵を見ることが好きなので、もしかしたら人一倍そう思っているかもしれません。ですが、「表現の自由」は「公共の福祉」に反するようなら制限されます。それはそれでいいのですが、この基準が人によって違っていることが、私は問題ではないかと思えます。

例えば、「チャタレイ事件」です。この事件は、「チャタレイ夫人の恋人」というイギリスの、D.H. ローレンスという方の小説で、この訳と出版に関わった、伊藤整という人と小山久二郎という人が起訴された事件です。性的な描写があったとされ、二人は有罪となり、指摘された部分が、消されて出版されました。その部分を一部読むことができたので、読んでみました。あまりよろしくないと思う人もいますし、別に良いのではないかと、思う人もいます。私は良いのではないかと、思いました。世の中には、「官能小説」というものがありますし、未成年に読ませたくないのなら、煙草やお酒のように買える人を限定すれば良いと思うのです。

「表現の自由」は戦前からあったのですが、治安維持法や、検閲などがあったため、現代のような自由はなかったと思います。現代の「表現の自由」は、ありがたいものだと思います。小説を書く人も、新聞の記事を書く人も、「表現の自由」によって支えられています。それを読む人も、「表現の自由」がなければ、読むことができないと思います。また、「表現の自由」によって、人々の思想も育まれて行っていると思うので、大切にしていきたいと思います。また、新聞は世の中の情報、小説や漫画は表現力を養っていくので、これらを読むことは一石二鳥だと考えるのです。

「人を変える力」

文化学園長野高校2年(現在) 山田 絢音

「SDGs?なにそれ。」、高校に通い始めて少し経った頃、この言葉と出会いました。ユネスコスクールである本校は、SDGsの活動を活発に行っています。当初、なんだか面倒くさいなと感じていました。

しかし、昨年6月28日付「ヤンジャ」の記事と出会いました。それは、同じ高校生が学校という枠を超えて地域で活動している記事でした。SDGsは世界共通の目標なので、私達にできることは無いと思っていましたが、この出会いは、私の固定観念を覆しました。

その日からSDGsにどんどん熱中し、自分の研究テーマを持つまでになりました。SDGs目標2「飢餓を0に」をもとに、身近な地域を見てみると、両親が共働きで子どもが一人で食事をする「孤食」の家庭が多いことが分かりました。それを支援する子ども食堂に視点を置くことにしたのです。

調べたりするだけでなく、実際に子ども食堂に参加してみました。印象的だったことは、孤食の子どもだけが集まる場所ではなく、お年寄りの方の集まる、地域のコミュニケーションの場所だった、ということです。

子ども食堂に行くと、課題が浮き彫りになりました。主催者側の莫大な負担、本当に必要としている人への周知不足などです。すぐには解決できないことばかりで、現実を突き付けられ、愕然としました。しかし、私は諦めず、その後も何回も足を運んで、今も解決の糸口を探っています。最近では、子ども食堂についてクラスの議題に出すなど、身近なところから発信を試みています。

私は、一枚の新聞記事との出会いから、その後半年でとても変わりました。自らチャンスを作り、行動を起こすことができるようになったのです。新聞には「人を変える力」がある、そう確信しました。私にとって新聞は、毎日新しい発見が詰まった、宝石箱です。

「インプットだけでは終われない」

文化学園長野高校2年(現在) 西澤 桃子

書物を沢山読む人は物事を論理的に考えることができる、とよく言われる。私も学校の先生に新聞や本をよく読んだ方が良いと言われるのだが、なぜ皆そのようなことを言うのだろうと疑問に思っていた。それは、テレビのニュースでも今起こっていることを知ることができるからである。だが最近、書物を読むよう勧められる理由が分かったような気がする。

確かにテレビでニュースを見ることも大切だが、ニュースの場合、音声があるため文字を読まずに内容が頭に入ってしまう。簡単なインプットだ。私は、時間を掛けて文章を読み、頭で考えながら理解することで、人は様々なことを「学ぶ」と思う。また、ニュースでは映像が流れるが、新聞は文章、時には一枚の写真だけの記事ある。その少ない情報の中で内容を理解しなければならない。これらの点で新聞には、脳を活性化させる要素があると思う。

中学1年生の時、新聞スクラップの課題が出た。毎日一つ、自分の気になる記事を取り上げ、その記事の要約と感想、疑問点をまとめた。最初は好きなジャンルの記事ばかりをまとめていたが、だんだん様々なジャンルに目を向けるようになり、テレビだけでは知り得ないような内容が沢山あることを知り、とても興味深かった。他にも、テレビと新聞を比較したとき、同じ内容でも伝え方が違う。取材する人、伝える人が違えば、考えも少しずつ違うのは当然であるが、様々な視点から物事を「考え」させる点は、何回も繰り返し読める新聞に軍配が上がる。

そして、新聞は読み放すともったいない代物だ。新聞を読み、何を感じ、どう考えたかを他者と共有し、お互いの意見を多角的に見つめ、時に議論することができるのだ。新聞は人と人を繋ぐ手段となり得る。情報のインプットだけでは終わらないのだ。

そういった意味で新聞は、より良き未来を拓くために私にとって、必要不可欠なものと言えよう。